

網代が淵見アゲ石、撞木山、其下に烏帽子岩、次に絹卷石とて、右方川端巖山に横ハル、似絹卷、巨石をいふ、屏風石折敷岩、味噌石アリ、左方楊枝村山銅常樂寺、藥師佛は、往昔京、三十三間堂の梁木、柳の樹、大木の出たる處、其柳の伐株を以て、七體の藥師如來を刻み、此寺に安置す、因是地名も即チ楊枝村と名く、カイ餅石筒井岩アリ、和氣村美毛登明神祭菊理姫命名所也、風雅集に有漏路より無漏に入ぬる道なれば、是ぞ佛の美毛登なるべきとありしも、此祠なり、右方達摩石、左方滑が瀧、布引の瀧、三重の瀧、夢の瀧、右方犬戻り、猿すべり、親不知、子ゑらすと云難所アリ、陸地に火鉢の森見たり、右手、骨石、眞魚箸石、二本直立如箸植たり、其已前庖丁石とて有、去、亥年の地震に折て今はなし、俎石は其形四角なる平岩なり、其上に肝石とて大サ、其徑一間餘の圓石アリ、鈎鐘石は巨巖の根を離れ積立たる絶壁の上に峙ち覆はる、其下を河船乗くだる也、石舟と云岩は、大船を仰のけたるが如き巨巖なり、田長村のあたりに至レバ、雪の瀧最見事なり、懸崖万仞の高より、水沫宛も打綿の如き一固マリに成て、雪の飄りくだるに似たるをもて名焉、白絲の瀧は、如縷細くわかれて太虚より眞直にくだるをもて名とす、九里八町の間、に世に聞たる瀧の數都て六箇所みな壯觀也、

〔増鏡六おりある雪〕御幸くまの、本宮につかせ給て、それより新宮の川舟にたてまつりてさしわたすほど、川のおもて所せきまでつゞきたるも、御らんじなれぬさまなれば、院のうへ後嵯峨

くまの川せきりにわたすすぎ舟のへなみに袖のぬれにけるかな

〔倭訓栞前編三十六よし〕の三。大河の。一。にいふ吉野川は、阿波國也、所謂小鳴戸也、

〔阿波志三六好郡〕芳野河、源二、一出土佐、曰鸕鷀溪、流四十里、至下名、一出伊豫、銅山、流二十餘里、至山

背谷文字名、二十餘里、至川崎合流、徑四十步餘、船不能過此、而上水清駛可愛、逕、叢田益急、東南至城府、二十五里、至第十徑、百八十步許、分而爲二、北曰音瀬川、徑不過百步、南曰古川、徑三百五十步許